

T-Nav*i*



巻頭言

「令和の日本型学校教育」 が求めるもの

上智大学教授
(文部科学省教育
課程部会委員)
奈須 正裕



【特集】性教育をとらえなおす

注目企画
1

渡辺大輔先生インタビュー
「包括的性教育」
とは何か

注目企画
2

繰り返し伝えたい！
今すぐできる
声かけ3STEP



埼玉大学准教授 渡辺 大輔

道徳

道徳授業

誌上チェック
&
アドバイス



筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行
岐阜県美濃加茂市立古井小学校教諭 田中 博子

座談会 「指導と評価の一体化」に向けて（後編）

敬愛大学教授 市川 洋子
摂南大学教職支援センター講師 谷口 雄一
豊中市立島田小学校教諭 長岡 かの子

新連載 道徳教師用指導書 活用術！

Hop! とっても大事！ 内容項目の関連を考える
横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校教諭 根本 哲弥

保健
体育

ICTを活用した体育の授業実践例 ～4年：マット運動～

日本体育大学教授 白旗 和也
墨田区立外手小学校教諭 杉本 智香



コロナ禍における 夏の熱中症・感染症対策

済生会横浜市東部病院
患者支援センター長／栄養部部长 谷口 英喜



新企画 事例から考える！SDGsとの向き合い方

NPO法人eboard

子どもが「学びをあきらめない社会」へ。
「やさしい字幕」付きの学習動画を開発。

NPO法人eboard代表理事 中村 孝一



【光文書院からのお知らせ】
夏休み前までの復習はかんぺき！光文書院の夏休み教材

光文書院発行の 教育情報誌です。

今、必要な最新の教育情報を
詳しくやさしく
お伝えしていきます！

CONTENTS

小学校現場で
ご活躍されている
先生方の
力になります！

役立つ！
情報満載



「令和の日本型学校教育」 が求めるもの

すべての子どもを自立した学習者に育てることを目指す「令和の日本型学校教育」。その実現のために不可欠な「学びのパラダイムシフト」について、奈須先生にご示唆いただきました。 奈須 正裕先生 ▶



性教育をとらえなおす

先生方は「性教育」という言葉にどのようなイメージを抱かれていますでしょうか。近年、身体の仕組みや生殖の話だけでなく、性の多様性やジェンダー平等などの幅広い内容を含んだ「包括的性教育」という概念が注目を集めています。埼玉大学准教授の渡辺大輔先生に、包括的性教育の考え方や小学校で実践できるアプローチについて伺いました。

道徳授業 誌上チェック&アドバイス

道徳座談会
「指導と評価の一体化」に向けて(後編) ▶ P.16~17
道徳教師用指導書 活用術! Hop! とっても大事!
内容項目の関連を考える ▶ P.18~19

ICTを活用した体育の授業実践例

~4年: マット運動~ ▶ P.20~23
コロナ禍における
夏の熱中症・感染症対策 ▶ P.24~25

事例から考える! SDGsとの向き合い方 NPO法人eboard

子どもが「学びをあきらめない」社会へ。「やさしい字幕」付きの学習動画を開発。
【光文書院からのお知らせ】夏休み前までの復習はかんぺき!
光文書院の夏休み教材 ▶ P.30~31

読者参加型情報誌を目指してまいります

ご要望をお寄せください!

この二人の対談記事を読みたくですね!

弊社がコーディネートして、対談企画を実現していきます。

特別支援教育を特集してほしいな。

弊社がご要望のあったトピックを取材して、誌面でお伝えします。

私の道徳実践を達人先生に助言してほしい!

道徳指導や実践経験の豊富な先生に、本誌上で助言をいただきます。

取り上げてほしい情報やご意見を、弊社 Web サイトを通してお寄せください。

お問い合わせフォームはこちら

ご意見・ご感想は、弊社 Web サイトを通じてお寄せください!

公式 Twitter はこちら

Twitter でも募集中! ハッシュタグ「#なるほどていーなび」をつけてつぶやきをシェアしてください!

T-Navi Edu

T-Navi Edu(ディーナビ・エデュ) Vol.12

発行 2022年6月
編者 小学校若手教員サポート研究会
著作兼 長谷川 知彦
発行者

発行所 株式会社光文書院

〒102-0076 東京都千代田区五番町14
TEL 03-3262-3271(代)
URL https://www.kobun.co.jp/
印刷・製本 三松堂株式会社

◇表紙・本文デザイン: Tokyo A
◇本文イラスト: 熊アート

巻頭言

「令和の日本型学校教育」 が求めるもの

「自立した学習者」を育てるためには、従来の規律訓練型教育から脱却し、子どもが各自の判断で主体的・個性的に学びを進めていくパラダイムシフトする必要があります。



上智大学教授
(文部科学省教育課程部会委員)
奈須 正裕

すべての子どもを自立した学習者に育てる

中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」にもあるように、「子供たちの知・徳・体を一体で育む『日本型学校教育』は、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などについて諸外国から高く評価されている」(p.5) のですが、同時に数々の問題を抱え込んでいることが、新型コロナウイルスの感染拡大によって明らかとなりました。

典型的には「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をして良いか分からず』学びを止めてしまうという実態が見られ

たこと」であり、「これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかった」(p.13) のです。

その原因について答申は「我が国の経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解(知識)の暗記』の比重が大きくなっていったこと、「学校では『みんなと同じことを、同じように』を過度に要求する面が見られ、学校生活においても『同調圧力』を感じる子供が増えていった」(p.8) ことなどを挙げています。

従来の「日本型学校教育」の課題

はずれてはいけない

正解主義

言われたことを言われたとおりに

同調圧力

自立した
学習者が
育たない



「令和の日本型学校教育」では、これら「正解主義」や「同調圧力」といった従来からの問題を克服し、すべての子どもを「自立した学習者」に育てることを目指します。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」も、そのために求められるのです。

教師を介して知識や経験に出会う学び

したがって、個別最適な学びも協働的な学びも、単なる授業形態の問題として扱うのではなく、いわゆるパラダイムシフトが求められます。ここで参考になるのが、1990年にブランソンが来たるべき情報化社会を見据えて提起した、資料1のようなモデルでしょう。教師があらかじめ正解を一方向的に教え込む「口頭継承パラダイム」という過去のモデルから、1990年時点では教師と生徒、生徒と生徒の間で双方向のやり取りがなされる「現在のパラダイム」への移行が完成しているとされています。

ちなみに、ブランソンはアメリカの学校の現状に基づき、生徒間の相互作用は二次的なものに留まっているとして、わざわざその箇所の矢印を点線にしていますが、日本の授業ならば、堂々と太い実線で表していいでしょう。この点に関して、日本の授業は世界に冠たる水準を実現しているのです。

とはいえ、そんな日本の授業も含め「現在のパラダイム」では、生徒は常に教師を介してのみ、学習の対象である「経験」や「知識」に出会うよう制約されています。たとえば、日本の教師は確かに子どもたちの問いを大切にしてきました。しかし、それさえも「なるほど、みなさんの意見を聞いています、こんな問いが成り立ちそうだね。今日はみんなでこのことを考えてみましょう」といった具合に、常に一度教師を通過し、教師の発問の形で改めて子どもたちに問いかけられるものだったのではないのでしょうか。少なくとも一人ひとりの子どもが、その瞬間

に立ち現れた自らの問いに即応して自由に学びを進めるといった状況が許容されることは、決して多くはなかったように思うのです。

情報のコントローラーを子どもに委ねる

これに対し、ブランソンが未来の学校教育のモデルとした「情報技術パラダイム」では、生徒が教師を介することなく、子どもたち一人ひとりの判断でいつでも自由に「知識データベース」や「エキスパートシステム」にアクセスし、各自が今現在必要とする「経験」や「知識」と出会い、主体的・個性的に学びを進めていきます。

もちろん、学びは「孤立」的なものではなく、生徒相互の間で自発的に生じる豊かで自然な対話や協働を伴いながら展開されます。「現在のパラダイム」では伝達者、ゲートキーパーの役割を担い、情報のコントローラーを全面的に掌握していた教師は、その役割を学びのコーディネーター、ファシリテーターへと大きく変貌させていくのです。そうすると、もはや過剰な権威も不要となるでしょう。今なお、中学の教師が時折折口にする「生徒になめられないことが肝心」といった構えは、学校からすっかり放逐されるに違いありません。

ただ、このようなパラダイムシフトを実現し、個別最適な学びを日常化するには、子どもたち一人ひとりが自在に活用できる情報端末と、ストレスなくクラウドにアクセスできる高速大容量のネットワーク環境が不可欠です。ブランソンがモデルを提起した1990年時点では夢のような話であったと思われるかもしれませんが、これが2022年の日本の学校では、すでにほぼ完璧に実現されています。

これこそがGIGAスクール構想の真価であり、個別最適な学びに際し、答申が「子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいく」(p.17)と語る真意です。一人一台端末がほぼすべての授業で主体的・個性的に使われている学校と、週に何回かのみ、しかも一斉画一的にしか使われない学校の違いは、このようなパラダイムシフトの実現状況に全面的に依存しています。

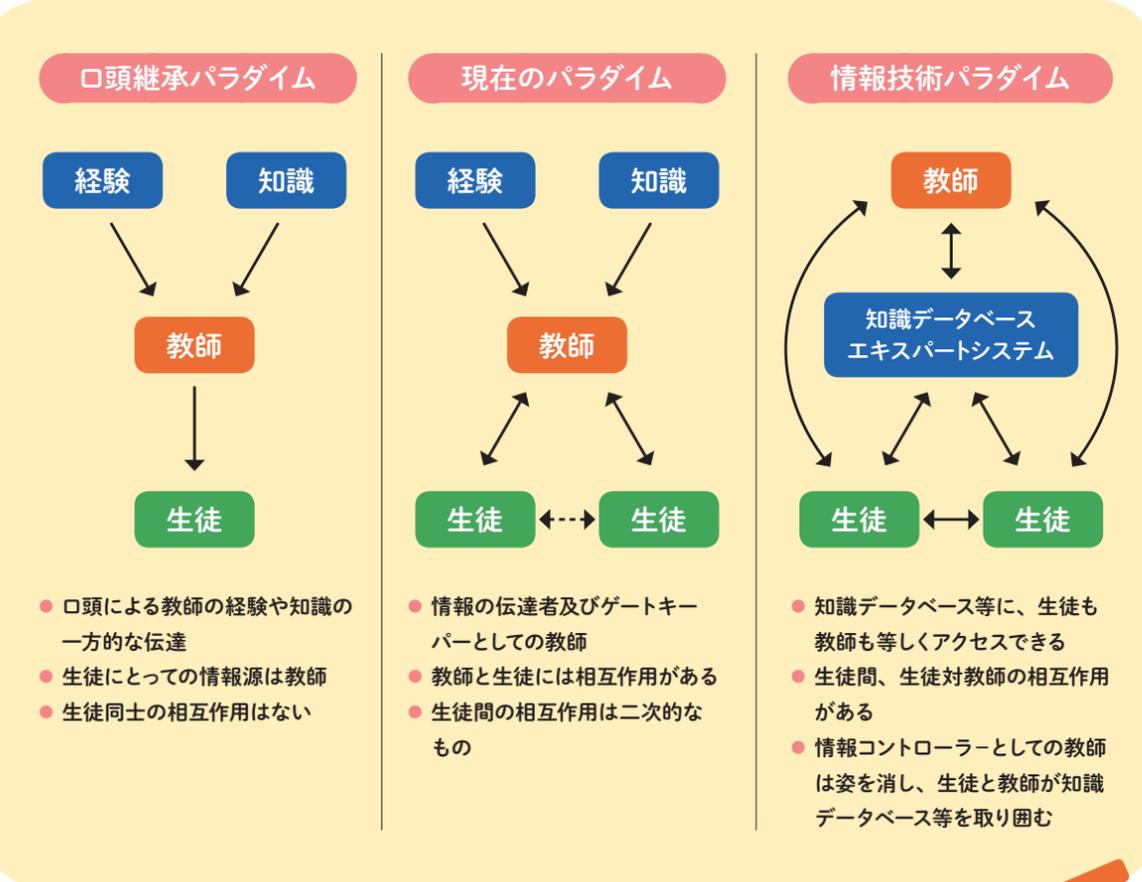
規律訓練型教育との決別

ブランソンは、未来のモデルの中心に「知識データベース」と「エキスパートシステム」を描きましたが、さらに敷衍するならば、学習環境全般とすることも可能でしょう。すると、日本の一般的な幼児教育のモデルになります。

資料2はごく普通の幼稚園の様子ですが、道具も材料も子どもの都合とタイミングで、いつでも自由に使ってよいようになっています。

資料1 学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson,1990)

Robert K. Branson 1990 Issues in the Design of Schooling : Changing the Paradigm. Educational Technology, Vol.30, No.4, 7-10.



教師に求められる役割の変化

これまで 授業を
コントロール・支配する

これから 授業をコーディネートする・
ファシリテートする



資料2 幼稚園における学習環境整備



これは、教育的にはルソーが『エミール』で描いた世界にもなります。「情報技術パラダイム」は、必ずしも未来のモデルではなかったわけですが、逆に普遍性を兼ね備えていたともいえます。

ところが、小学校に上がった途端「今日はハサミを使います。先生が配りますから、1班の人だけ前にいらっしやい。後の人は自分の席で静かに待ちます」といった抑圧的環境に置かれるのです。子どもたちが、それまで培ってきた主体性も個性も知性も感性もすべて封印し、万事において指示待ちになるのは、無理のないところでしょう。

「令和の日本型学校教育」への第一歩は、「手はお膝、お口チャック」や「生徒になめられない」など、抑圧的な規律訓練型教育との決別から開始されるべきです。

今こそ学びのパラダイムシフトを

ある小学校で、間接光が入る明るい廊下の出窓部分に顕微鏡を4台常時設置し、いつでも使ってよいことにしてみました(資料3)。すると子どもたちは、雪が降れば雪の結晶を観察し、アサガオの花が咲けば花びらを見る、そんな活動を日常的に、ごく自然に行うようになっていきます。顕微鏡は意外なほど壊れることもなく、子どもたちは理科の学習の際、顕微鏡の操作やプレパラートづくりを手際よく進められるようになりました。高学年の子どもが低学年の子どもに顕微鏡をのぞかせてあげるといったことも、日常茶飯事です。1年生の子どもたちは「早く理科の勉強がしたいなあ」と心待ちにするようになったといいます。

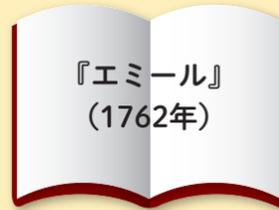
みなさんの学校の顕微鏡は、年間に何日くらい使われているのでしょうか。子どもたちは顕微鏡を、卒業するまでに何回操作するのでしょうか。本当にわずかな日数しか使われない、操作する機会がほとんどないというのが実情ではないかと思えます。そうこうするうちに耐用年数が来て、廃棄になったりもしているでしょう。

GIGAスクール構想により配備された一人一台端末が同様の運命をたどることは、なんとしてでも避けるべきです。そのためにも、学校における学びのパラダイムシフトが、今こそ切実に求められているのです。

ルソーが『エミール』で描いた教育



ジャン・ジャック・ルソー
(1712年~1778年)
フランスの哲学者



子どもは
自然に学習し、
成長していく存在



教育においては、
指示し過ぎず、
その成長を見守り、
寄り添う姿勢が大切!



ルソーはこれを
「消極教育」と呼んだ

資料3 いつでも自由に使える顕微鏡



性教育を とらえなおす



Ushico / PIXTA(ピクスタ)



注目企画

1

渡辺大輔先生インタビュー 「包括的性教育」とは何か

「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」翻訳者の一人である、埼玉大学准教授の渡辺大輔先生に、包括的性教育の考え方や小学校でできる性教育のアプローチについて伺いました。

▶ 渡辺先生のインタビューは p.8 から!



注目企画

2

繰り返し伝えたい! 今すぐできる声かけ3STEP

子どもを性暴力から守るために、包括的性教育の視点から実践できる声かけを教えてくださいました。子どもたちの行動範囲が広がる夏休み前に、ぜひ取り組んでみませんか?

▶ 声かけ実践例は p.12 から!



渡辺大輔先生インタビュー 「包括的性教育」とは何か

「包括的性教育」という言葉をご存知でしょうか。包括的性教育とは、身体や生殖の仕組みだけでなく、人間関係や性の多様性、ジェンダー平等、幸福など幅広いテーマを含む教育です。包括的性教育の進め方を記したユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」は、性教育の国際的な指針になっています。

今回は「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」翻訳者の一人である埼玉大学准教授の渡辺大輔先生に、包括的性教育の考え方や、小学校でできる性教育のアプローチについて伺いました。



埼玉大学
基盤教育研究センター准教授
渡辺 大輔

「包括的性教育」とは何か

——はじめに「包括的性教育」とはどのようなものですか。

「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」(以下、「ガイダンス」)では、「セクシュアリティの認知的、感情的、身体的、社会的側面についての、カリキュラムをベースにした教育と学習のプロセス」(p.28)と定義されています。

日本では、性教育というと生殖の仕組み、二次性徴、性感染症予防の話などがイメージされがちですが、包括的性教育では、身体的な話だけでなく、社会的な規範の是非、差別や暴力、ジェンダーの不平等をなくす方法、性を安全に楽しむ権利、リスクに直面したときにアクセスできる機関など、幅広いテーマを包括的に扱います。

包括的性教育の目的は、学習者のウェルビーイング(※1)の実現です。また、自他ともに尊重される関係性を獲得すること、自他のウェルビーイングに自分の選択がどう影響するか考えること、生涯を通じてすべての人の権利が守られると理解することを目指しています。

そのベースには「人権の尊重」があり、学習者の権利は守られるべきであること、守られていないときは声を上げてよいことを伝えます。そして、権利を守るために声を上げて社会を変えようとする態度(シティズンシップ)や、そのために必要な情報収集・交渉などのスキルも育成していきます。

(※1) “well-being”。直訳すると幸福、健康。単に病気でないだけでなく、肉体的にも精神的にも社会的にも、すべてが満たされた状態のこと。

——「幅広いテーマを包括的に扱う」とのことですが、扱う内容の基準はあるのでしょうか。

「ガイダンス」では、下記の8つのキーコンセプトを設定しています。

- キーコンセプト① 人間関係
- キーコンセプト② 価値観、人権、文化、セクシュアリティ
- キーコンセプト③ ジェンダーの理解
- キーコンセプト④ 暴力と安全確保
- キーコンセプト⑤ 健康とウェルビーイング(幸福)のためのスキル
- キーコンセプト⑥ 人間のからだと発達
- キーコンセプト⑦ セクシュアリティと性的行動
- キーコンセプト⑧ 性と生殖に関する健康

学習者は年齢で4つのグループ(5~8歳、9~12歳、12~15歳、15~18歳以上)に分けられ、年齢発達に合わせた系統的なカリキュラムで、キーコンセプトを繰り返し、継続的に学ぶことが勧められています。また、扱う内容は科学的に正確であることも大切です。

包括的性教育の重要事項

(「ガイダンス」p.28~31より抜粋)

- 科学的に正確であること
- 徐々に進展すること
- 年齢・成長に即していること
- カリキュラムベースであること
- 包括的であること
- 人権的アプローチに基づいていること
- ジェンダー平等を基盤にしていること
- 文化的関係と状況に適應させること
- 変化をもたらすこと
- 健康的な選択のためのライフスキルを発達させること

日本における性教育

——包括的性教育の考え方は、日本ではどのように受け入れられているのでしょうか。

冒頭にも申し上げたのですが、日本では「性教育とは生殖の話だ」というイメージが強く、包括的性教育の考え方が十分に浸透しているとはいえません。

国連の子どもの権利委員会は、包括的性教育やセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(※2)について、学校の必修カリキュラムの一部として学ぶ機会の確保や、包括的な政策の実施を日本政府に勧告しているのですが、ほとんどの人は、こうしたことを十分に学んだ経験がないと思います。

(※2) 「性と生殖に関する健康と権利」。セクシュアリティや性生活、妊娠・出産など、自分の身体や性、生殖の健康が保障され、関連することを自分で決める権利。

——包括的性教育に限らず、性教育自体がそれほど積極的に実施されていない印象があります。

性教育の話をする、「性の話は自然に学ぶものだ」「寝た子を起さずな」と言われてしまうことがあります。ですが、「性に関する話は表立ってするものではない」という共通認識ができてしまうと、性に関する悩みを抱えていても、「恥ずかしくて誰にも言えない」「こんなことを話して、性に対する関心が高いと思われるくらいやだ」と一人で抱え込んでしまう人が増えてしまいます。その結果、性感染症などの病気や性暴力の被害が深刻化してしまうこともありますよね。

包括的性教育は、決して「性に奔放になりましょう」という話ではないんです。私たちには性を楽しむ権利がありますが、それにはリスクも伴います。「年齢や気持ちに合わせて性を安全に楽しむためにはどうすればよいか、どのような情報が必要か考えましょう」「いざリスクに直面してしまったときに頼れる相手や機関、

適切なサポートを知っておきましょう」というのが、包括的性教育の考え方です。

また、包括的性教育は暴力を起こさないための学びでもあります。性的欲求や支配欲はたびたび愛と混同され、加害につながってしまいます。「同意」とは何かを学んだり、相手に愛情を伝えるための適切な触れ合いについて考えたりすることで、加害を生まないようにすることも、包括的性教育の大きな役割です。

——日本の性教育の課題はどのようなところにあると思いますか。

子どもたちの権利がベースではなく、表面的に「○○してはいけない」と指導することが多いところだと思います。

たとえば、「自分の身体は人に見せたり触らせたりしてはいけません」という指導はよくありますが、前提となる「自分の身体に誰がどのように触れるかは、すべて自分で決める権利がある」という「からだの権利」についての学びはほとんどありません。

「○○は見せてはいけません」「○○は大切です」と大人が一方的に教えるのではなく、たとえば「手をつなぐのはいいけど髪を触られるのはいやだ」といった「境界(バウンダリー)」を子どもたち自身が決め、それを互いに尊重していくことが必要です。そのためには、一律に「距離を取りなさい」と触れ合いから遠ざけるのではなく、いろいろな人との触れ合いを通じて、心地よい触れ合いとそうでない触れ合いの違いを知っていかなくてはなりません。

また、「境界」を尊重し合うためには、触れ合う前には明確な同意をとってもらふ経験、いやだと感じたときには「NO」と言う経験、「NO」と言えばやめてもらえる経験などを積み重ねていく必要もあります。

境界(バウンダリー)と同意

判断のための情報や学習が
とても大事!

自分の身体のこと
自分で決める権利がある!



何がOKで、何がNGなのか、
自分の境界
(バウンダリー)は
自分で自由に
決めてよい!



自分の境界
(バウンダリー)は
いつでも
変えてよい!



境界(バウンダリー)は
人によって違うので、
行動する前に
聞いてみる!



境界(バウンダリー)が
守られていないときは
「NO」と言って
よい!



対等な関係での明確な
「YES」だけが同意。
同意がもらえなければ
すぐにやめる!



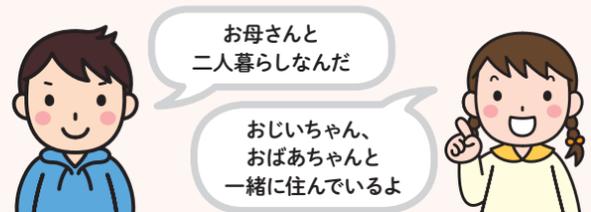
「性」を取り巻く無意識バイアス

—— 学校での「性」の扱いについてはどう思われますか。

たとえば、性の多様性の話では、性別に関係なく子どもたちの個性を大切にすべきだと理解されている先生が増えていると思います。

一方で、集会の時間には男女別に並ばせるなど、よく考えてみると必要性のない男女の分断が行われていることもあります。意味なく血液型で分けたり、人種で分けたりはしないですね。また、「男女混合名簿」と呼ばれることの多い「性別にかかわらない名簿」の全面的な導入も必要です。導入検討の際に「面倒だ」という声も聞きますが、それが杞憂だということが、既に導入している学校をみればわかります。

あるいは、家族の在り方についても、子どもたちの家族は多様であるにもかかわらず、両親がそろって仲のよい家族が標準とされてしまいがちです。そうでない子どもは、特殊な、あるいはかわいそうな存在だと思われてしまうこともあり、自分の家族について安心して語れません。標準とされる枠組みから外れた子どもが安心して自分を表現できる場がつけられていないことも、大きな問題だと感じています。



▲家族の形は多様であることを学ぶことで、子どもたちが自分について安心して語れる場をつくる

—— そうした無意識の枠組みやバイアスを除いていくために、先生方が配慮できることはあるでしょうか。

先生方は非常にお忙しいですが、可能であれば、まずご自身で包括的性教育について学ぶ時間や、先生同士で話される時間が確保できるとよいですね。本や動画もたくさんあるので、ご自身と照らし合わせながら学んでいただくと、自分の中の思い込みや無意識のバイアスに次第に気づくことができるのではないのでしょうか。

思い込みや偏見・無意識のバイアスに気づけると、子どもとの関わり方が変わるだけでなく、先生ご自身も肩の力が抜け、生きやすくなるのではないかなと思っています。

あとは、「普通」という言葉を使わないように気をつけていただきたいと思います。「普通は○○でしょう」と

いう言い方をしてしまいそうになったとき、ぐっと飲みこんで、「普通」以外の言葉で表すとどうなるかを考えていただくと、ご自身でも気づいていなかったバイアスに気づけることがあると思います。



▲「普通」「当たり前」という言葉を使いそうになったら無意識のバイアスがないかを考えてみる

学校で取り組む包括的性教育

—— 包括的性教育に取り組んでみたいと考えた先生方は、どのようなアプローチからスタートできるでしょうか。

性教育は、保健体育や理科の授業で扱うものだというイメージをもたれがちですが、家庭科や道徳で扱う家族のことや、社会で扱う憲法の平等権や男女共同参画の話、国語で扱う恋愛・友情の物語など、性について学べる機会は実は学習指導要領の中に幅広くあるんです。性教育とは、身体全体に関わる人権の話なのだととらえなおしていただければ、性の話をするチャンスが広がると思います。

東京都が2019年に改訂した「性教育の手引」では、教科ごとに性に関する指導を実施できる機会が表にまとめられているので、こちらも参考になるかもしれません。

(2) 生活科			
小学校	学校、家庭及び地域の生活に関する内容		(1) 学校と生活 (2) 家庭と生活 (3) 地域と生活
	自分自身の成長や生活に関する内容		(9) 自分の成長
(10) 特別活動			
小学校	学級活動	(2) 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全	ア 基本的な生活習慣の形成 イ よりよい人間関係の形成 ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

▲東京都教育委員会「性教育の手引」より一部抜粋

先生方も、性に関する指導を体系的に学んだことがないと思いますので、「子どもと一緒に学ぶ」というスタンスでよいと思います。今はよい絵本もたくさん出ているので、そういったものを活用するのもおすすめです。

大切なのは、子どもの疑問に真摯に向き合うことです。もし、子どもたちからその場で答えることが難しい質問が出てきたとしても、笑ってごまかしたり頭ごなしに否定したりするのではなく、「後で一緒に絵本を読んでみよう」「○○先生に聞きに行ってみようか」など、まずは疑問をしっかりと受け止めていることを示

してあげましょう。そうして、子どもにとって、自分の権利や身体の話にしっかり向き合ってくれる、信頼できる大人になることが、包括的性教育の第一歩です。

—— 近年、家庭での性教育に対する関心も高まっているように感じます。学校でできる性教育と家庭でできる性教育の違いはあるでしょうか。また、学校だからこそできることがあれば教えていただきたいです。

自分のことについて安心して語れる場をつくること、子どもの疑問に真摯に答えることなど、ベースは同じだと思います。そのうえで、家庭が安全な場所ではない子どももいるので「いろいろな家族があって、たとえ家族であっても健全で安心できる関係性が築けるとは限らない」「その場合は助けを求めてもよい」という話は学校という家庭外の場だからこそできるかと思えます。

また、公的な機関と連携した指導は、家庭での実施が難しいと思うので、たとえば保健所や性暴力の相談窓口などと連携して、実際の場面を想定した模擬相談のような実践的な指導ができるとよいのではないのでしょうか。

さらに、学校は同年代の子どもたちが一緒に学ぶ場でもあるので、先生に対してはもちろん、子どもたち同士で話し合ったり悩みを打ち明けたりすることで、自分を見つめなおすことができたり、同じ悩みをもっている友だちがいることを知って安心できたりする子どももいると思います。



—— 小学校には幅広い年代の子どもたちがいますが、それぞれの年齢で扱う内容は「ガイダンス」を参考にすればよいでしょうか。

もちろん基準にはなりますが、子どもたちの様子を

よく観察することがいちばん大切です。今どのような状況で、どのような知識をもって、何に疑問を抱いているのか。そういったことを日常の会話の中から拾って、「まずは○○の話をしたいから、『ガイダンス』のこのページを参考にしてみよう」という使い方ができるとよいと思います。

また、そもそも「ガイダンス」の内容が子どもの実態に合っているか、クリティカル（批判的）な視点で見るとも大切です。

権利保障のための包括的性教育

—— ここまでお話を伺ってきましたが、ずばり、包括的性教育が必要な理由は何でしょうか。

繰り返しにはなりますが、私たちには性を十分に楽しむ権利があります。それは、性に積極的に、奔放になるということではなく、自分と他者の安全・安心をしっかり守り、自分たちの性を大切にすることです。

その権利を保障していくためには、自分にはどのような権利があるのかということ、その権利を脅かすものへの対処を知っておく必要があり、そのために必要なのが包括的性教育だと考えています。

—— ありがとうございます。最後に、包括的性教育に取り組まれている先生方、これから取り組みたいと思っている先生方に向けてメッセージをお願いいたします。

まずお伝えしたいのは、「先生方ご自身も、自分の身体を大切にされる権利を持っています」ということです。そのうえで、「先生方は今、大切にされていますか?」とお聞きしてみたいです。

先生方ご自身が大切にされている実感がないのに、子どもたちに「大切にされる権利がある」と教えるのは難しいですね。だからこそ、もしも「自分は大切にされていないな」と感じる先生がいらっしゃったら、ぜひ包括的性教育を勉強していただいて、ご自身が大切にされる環境・社会には何が必要なのか、どうすれば実現できるのかを私たちと一緒に考えていきましょう。

まとめ

子どもたちはもちろん、私たち大人にも深く関わっている包括的性教育。本記事が「自分は今、大切にされているだろうか?」と、一人の人間として振り返っていただくきっかけになっていれば幸いです。

p.12~13では、子どもを性暴力から守るために、包括的性教育の視点からはどのような声かけができるか渡辺先生に教えていただきました。子どもたちの行動範囲が広がる夏休み前に、ぜひ併せてご覧ください。

特集 性教育をとらえなおす



繰り返し伝えたい！
今すぐできる声かけ3STEP

警視庁の統計によると、小学生を対象にした性暴力（強制性交等・強制わいせつ）は年間およそ700件発生しています。（※1）

子どもたちの行動範囲が広がる夏休み。子どもを性暴力から守るために、包括的性教育の視点からはどのような声かけができるのでしょうか。企画1から引き続き、渡辺大輔先生に教えていただきました。

（※1）出典：警視庁生活安全局少年課「令和3年における少年非行、児童虐待及び子供の性被害の状況」



「あなたは権利をもっているよ！」



p.9でもお話ししたのですが、まずは、誰もが「自分の身体を大切にされる権利」「自分の身体に、誰がどのように触れるかを決める権利」をもっているんだよということを伝えます。

いきなり「〇〇してはいけません」といった「禁止」の指導から入るのではなく、子どもたちの権利の話からスタートし、それを守るためにはどうすればよいかを、子どもとともに考えることが大切です。

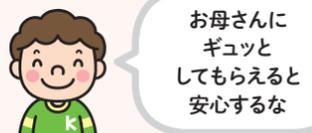


性暴力を防ぐための指導としてよくある「被害に遭わないために〇〇しましょう」という表現には注意が必要です。どんなに気をつけていても被害が避けられない場合はあって、そうしたときに、被害に遭った子どもが「自分が〇〇していなかったから…」と自分を責めてしまう恐れがあるからです。

「被害に遭わないために」ではなく、「あなたには大切にされる権利がある」としっかり伝えることが重要です。そして、何が「暴力」なのかを考えるとともに、「暴力はいけないことだ」と繰り返し伝えましょう。子どもたちの加害を防ぐだけでなく、暴力を受けたときに「これはいけないことだ」と子ども自身が気づけるようにするためです。

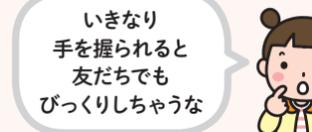


「あなたの権利は守られているかな？」



一人ひとりが権利を持っていることを伝えたら、次はそれがきちんと守られているかを子どもたちに問いかけてみます。

そして、どのようなときに大切にされている／されていないと感じるのかを考えてもらいましょう。具体的な場面を想像してみることが、自分たちの境界（バウンダリー）について認識したり、相手の権利を脅かさない適切な触れ合いについて考えたりすることにつながります。



「権利が守られていないときは、声を上げていいんだよ！」



STEP 1 で伝えた「自分の身体に、誰がどのように触れるかを決める権利」を守るため、友だち同士でも、家族や先生が相手でも、行動する前には同意をとってもらい権利があり、いやだと感じたときは「やめて」と言ってよいのだと話しましょう。

そして、権利が守られていないと感じたときは、それを他の人に相談する権利もあることを子どもたちに伝えます。仮に相手に「内緒だよ」と言われていたとしても、相談することは権利であり、相談したことで怒られたり責められたりすることはないことをきちんと話しましょう。



ユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」では、相談できる相手・機関を学ぶ際のポイントとして「identify（特定する）」という言葉が使われています。ただ漠然と「誰かに相談しましょう」と伝えるのではなく、「近くの交番に行っておまわりさんに相談することができるよ」「保健室の先生は絶対に聞いてくれるよ」「保健所には保健師さんって人がいるよ。場所はわかる？ 電話番号も調べておこうね」など、相談できる相手や機関、子どもができる行動を具体的に示してあげることが大切です。

3STEP まとめ



「あなたは権利をもっているよ！」



「あなたの権利は守られているかな？」



「権利が守られていないときは、声を上げていいんだよ！」

これらの声かけは、夏休み前はもちろん、普段の生活の中で繰り返し伝えることが大切です。子どもたちの安全と権利を守るため、ぜひ実践してみてくださいね！



包括的性教育についてもっと学びたい方はこちら！



国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】
——科学的根拠に基づいたアプローチ

編集：ユネスコ
翻訳：浅井 春夫、良 香織、
田代 美江子、福田 和子、
渡辺 大輔
発行：明石書店



マンガワークシートで学ぶ
多様な性と生

著：渡辺 大輔
発行：子どもの未来社



相談者・相談内容：考えをどう深めていくか



岐阜県美濃加茂市立古井小学校
田中 博子先生

道徳科においても、子どもたちが、「あれ？ わからないな。」「話し合いたいな。」といった「課題の必然性」を感じてほしいと考え、導入を工夫しました。しかし、授業を通して勤労について深い学びがあったか疑問です。アドバイスをお願いします。

4年

【主題名】
進んではたらく
【教材名】
みかん出し
(光文書院)

主題を通して考えたいこと

〈勤労、公共の精神〉

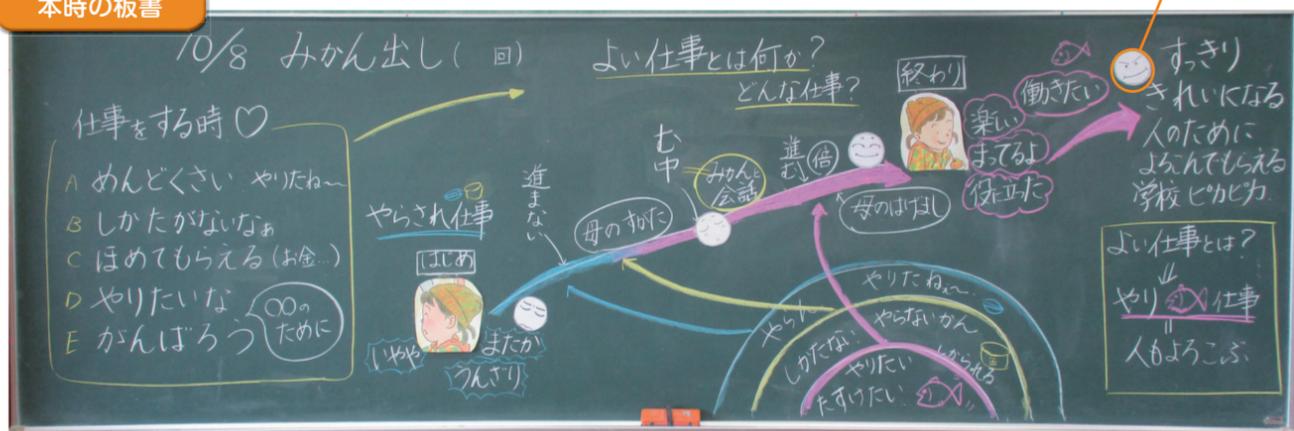
●自分が能動的に働くことは、自分の喜びや達成感につながり、その働きは、人のためになっていく。働く行為のもとになる心を知ることで、自分のために、人のために進んで働き、工夫して取り組んでいこうとする意欲を高めたい。



本時の展開

学 習 活 動	手 立 て
<ul style="list-style-type: none"> ○自分が仕事をするときの心を振り返り、ノートに書く。 ○「よい仕事をするには？」という本時のテーマをつくる。 ○主人公(純子)の働きぶりを整理し、行為の変容に気づく。 ○純子の働きぶりがどうして変わっていったのか、その行為のもととなった心を考える。 ○自分から進んで働きたいと感じ、主体的に働くようになっていくかを考える。 ○純子の仕事ぶりの変容から何を学んだかをまとめ、自分を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●授業をする前の自分もっている「働く」ときの気持ちを確かめさせる。意見を分類しながら板書し、問題意識をもたせ、本時のテーマを共有する。 ●板書の中で、純子の心を表情カードで表し、大きな変化があったことを全員に印象づける。 ●チョークの色や矢印の太さを変えることで、純子の「勤労」に対する心の変化を視覚的にとらえさせる。 ●話し合いを進めることによって、能動的な行為(働きぶり)は、自分の喜びや達成感となり、さらに人のためになっていることに気づかせる。その心で働くときどんな世界が生まれるのかまでを想像させる。 ●本時の学びを短い文で表現し、合い言葉として実践力につなげていく。

本時の板書



表情カード

授業で工夫した点

1 自己理解をしっかりと

「働くこと」に対する自分の認識を見つめさせたいと考えた。どんな心で働くことが自分や周りの人の幸せにつながるかを学び、実践意欲につながる授業を目指した。そのために、ノートへの記述を大切にしたり、合い言葉をみんなで考えたりと工夫した。

2 みんなが参加できる授業に

・板書の工夫(主人公の行為と心に分け、チョークの色や矢印の太さも変えて板書した)。
・表情カード(障がいのある児童にも理解できるように、カードの表情でそのときの心情を表した)。

授業の内容 (T:教師 C:児童)

T:みんなは、仕事をするときどんな気持ちでしていますか。
C:いやだな。めんどくさい。
C:しかたない。
C:褒めてもらいたい。お金がほしい。
T:それって、よい仕事になる?
C:…よい仕事?
C:やりたくないと思うときの仕事は雑になるよ。
T:よい仕事って、どんな仕事のことかな。今日はそれを考えてみよう。

(教材範読後)

T:純子さんの働きぶりや気持ちは、初めと終わりでどう変わったかな?
C:初めはうまく進まなかった。
C:嫌や。うんざり。またかという気持ち。
C:終わりは夢中。倍の速さになったよ。
C:楽しい。喜んでもらった。もっと働きたいな。
(意見を聞きながら、行為と気持ちを分けて板書。表情カードを選んでもらいながら、貼る。)

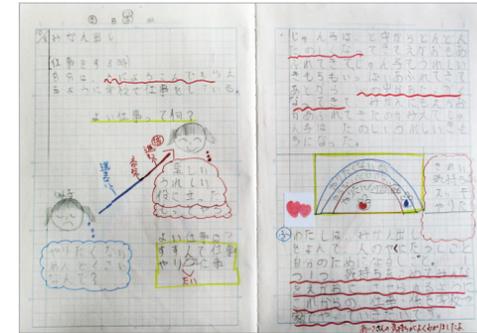
T:どうして、そんなに変わったのかな。ノートに書いてみよう。文でも絵でもいいよ。
(一人ひとりがノートに考えを書く。)

C:お母さんの励まし。褒めてもらったから。
C:気持ちが変わっていったのかな。
T:どんな風にな?
C:「やりたくない」から、「やらないかん、働きたい」って。自分からやりたいと思えるようになったんだ。
C:やりたねえ(やりたくないの意)から、やらないかん(やらない)。そして、やりたい(やりたい)になっていったんだ。
T:やりたい心が、よい仕事につながっていくの?
C:スピードも上がるし、丁寧な仕事になるし、自分も楽しくなっていく!

T:大事だね。そんな「〇〇たい!」の気持ちで進んでみんなが働くようになっていく?
C:すっきりする。
C:3組の教室がきれいになる。
C:学校がきれいになる。美濃加茂も、岐阜県も、日本も…。
T:すごいね。じゃあ、まとめるよ。よい仕事ってどんな仕事かな…。
C:やりたい(やりたい)気持ちでする仕事。
T:この3組にも「〇〇会社」*がいっぱいあるね。(ゴミ拾い会社の働きぶり、気持ちを紹介)
*〇〇会社…係活動に自分たちで社名を付けている。
T:今日わかったことや、いいなと思ったこと、これからしたいことを、ノートに書いてみよう。

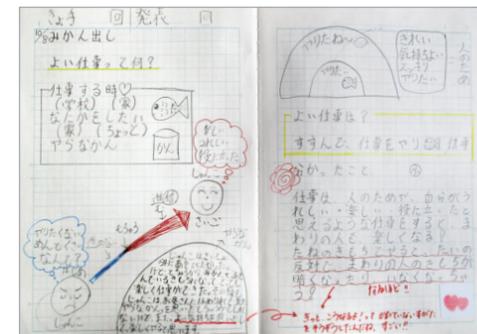
子どもの反応

【A児の振り返り】



主発問に対して自分の考えを書きながら深める作業をしています。これからの自分を見つめる記述もあります。

【B児の振り返り】



最後に本時の学びをノートにまとめています。その後、日記の中でも、「働くこと」についての思考を続けていました。

ここはナイス！ 子どもたちの 発言を生かす



田中先生が、子どもたちのやる気を引き出しながら授業を展開し、子ども自身のよきに向かう心をもとに学級内の仕事への取り組み方の意識転換を図ろうとされているところがナイスです。教材内の純子の仕事への意識の変容をとらえさせるために、板書を図式化し、色分けしながら書かれており、子どもたちも視覚的な情報からも考えやすかったのではないかと拝察します。「やらないかん」から「やりたい」へという合い言葉も、子どもたちの発言をもとにしたものであり、授業後も定着しそうですね。

私なら こうする！ 問い返し、 さらに 掘り下げる



純子の変容をとらえるのはよいのですが、その中身をもっと深く追究した方がよかったですと思います。私なら、「なぜ純子は仕事に対してやる気が出てきたのかな。顔が違うみかんから純子は何に気づくことができたのかな」と、掘り下げる問い返しをします。そのような問い返しから、みかんが純子の手に触れるまでに、いったい何人の手を渡ってきたのか。そして、これからどんな人の手に渡っていくのか。純子の働く手はどこにつながっていくのかを想像させることで、働く意味や意義を感じさせることができた。自ずと働き方に変化が生じると思うのです。そして「よい仕事」ができる人の本質を考えさせます。本質は転移しますから、きっと子どもたち自身の仕事に対する考え方に影響を及ぼしてくれることでしょう。

指導と評価の一体化」に向けて

2018年度に道徳科の評価が始まってから3年が経過しました。道徳の評価はどのように実施すべきか、どうすれば「指導と評価の一体化」が実現できるか、お悩みの先生もいらっしゃるかもしれません。そこで、本誌では3名の先生をお招きして座談会を実施。その模様を2号連続の特別企画でお届けいたします。

後編では、「指導と評価の一体化」に向け、日々の授業で実施する評価をどのように指導に活かしていくことがよいのかお話しいただきました。



前編では、日々の授業の評価の仕方や、評価の際に大切なことをテーマにお話しいただきました。

道徳科の評価4つのポイント

前編の
振り返り

- 1 学期末・年度末だけでなく、毎時間の評価も大切に！
- 2 授業を通しての子ども一人ひとりの変化を捉え、評価する！
- 3 言葉を使わずに内面を表現できるツールも活用する！
- 4 周囲の人と自分をつなげていける授業づくりにもトライ！

前編は
こちら



「評価」から「指導」へ

市川：ここからは、日々の評価を指導につなげていく方法についてお話ししていきたいです。前編でもお伝えしたように、道徳の評価はアセスメントのみですので、日々の評価の中で子どもたちの成長を見取れるような情報を収集することが大切になってきます。たとえば、長岡先生のようにノートを通じて日々の評価をされる先生であれば、授業中に子どもが書いたものを見て、「この子はこういう風に考えたんだ」という気づきを集めることができますよね。

前編では、ノートを通じた評価の話が多かったですが、他にはどのような評価の仕方があるのでしょうか。

長岡：ノート以外で評価したいときは、ペアでの交流を積極的に取り入れ、全体での発言が少ない子どもの発言を意識的に聞きに行くようにしています。

発言だけでなく、友達の意見に真剣に耳を傾ける子

どもの様子に気づくことができれば、「仲間の意見に真剣に耳を傾け、考えを広げようとする姿がありました」などと評価することができます。

谷口：子どもの様子も気づきになりますね。たとえば、子どもの目線。自分の経験や価値観をもとに考えている子は目線が上を向くことが多く、教材の記述を手掛かりに考えようとする子は下を向くことが多いんです。

市川：そうした気づきから授業の内容を振り返って、「もう少し発問を改善しなければいけない」というように、集めた情報を活用して子どもたちへの指導に還元できるとよいですね。



授業のねらいは明確に

市川：長岡先生は、日々の評価を指導につなげていくために心がけていらっしゃることはありますか？

長岡：授業を通して、その子が最初と最後でどう変わったかをしっかり見取れるよう、授業のつくり方や自分の考えの書かせ方を工夫する必要があると思っています。評価にはどのような情報が必要なのか、授業づくりのときから考えていくことが大切だと考えています。

他教科に比べ道徳は、授業を通して何ができるようになればよいのかわかりにくいですね。私は高学年の担任が多いので、授業のねらいもしっかり子どもたちと共有したいと思っています。「多面的・多角的な見方ができるようになろうね」「お話の感想を書くのではなく、自分の生き方につなげていくための時間なんだよ」というように、道徳の授業が子どもたちにとってどういう意味をもつものなのかをしっかりと伝えたいという思いで授業をすれば、子どもたちはそれを踏まえて見つけたことを書いてくれるので評価がしやすくなります。

谷口：授業のねらいを明確に示しておくことで、先生が評価をしやすいのはもちろん、子どもたちも自分で自分を評価することができますね。評価の観点が変わらないと、「今日はたくさん発言したな」というような表面的な評価しかできませんが、「自分の生き方につなげる時間だよ」と示してあげることで、じっくり考えたけれども発表はできなかったような子どもも、自分の頑張りや成長をしっかり実感することができると思います。

また、発言はなかったもののしっかり考えたことがノートやワークシートから読み取れたら、次の授業では手を挙げていなくてもその子を指名し、発言の機会を用意してあげるという対応もできるかもしれません。

「ノートは私の通知表」

市川：実際に、子どものノートから得た情報を指導に活用された経験はありますか。

長岡：道徳を学び始めたばかりの子どもたちは、ノートの書き方がわかっていないので、黒板をそのまま写してしまったりお話を読んだ感想を書いてしまったりする子も多いんです。そのような、どうやって道徳に取り組めばいいのか迷子になっている子どものノートを見つけたら、「主人公じゃなくて自分のことを書いてみよう」「自分がわかったことをまとめてみてね」というように方向性を示してあげるようにしています。

また、子どものコメントがあまり深まっていないなと感じたときは、自分の教材研究が足りていなかったときが多いと実感しています。「ノートは私の通知表」という気持ちで評価に臨み、子どもから思っていたようなコメントが得られなかったときには、自分の授業を見直すようにしています。

谷口：授業をつかった自分の指導力が子どものノートによって明らかになるということですね。「いいコメントが少なかったな」と感じて終わるのではなく、「ここが理解しにくかったみたいだから、次の授業では説明の仕方を工夫してみよう」というように自分の授業に活かしていくことが必要だと思います。

市川：もし子どもの考えがあまり深まっていないことを感じたら、次の授業で「こんな考えが出ていたけどどう思う？」というようにもう一度考える機会を設けてみるのもよいかもしれませんね。ひとつひとつの授業をぶつ切りにするのではなく、過去の授業の評価も活かして継続的に授業をつくっていく。こうしたことがまさに「指導と評価の一体化」につながっていくのだと思います。

「指導と評価の一体化」3つのポイント

- 1 授業を通して、子どもの成長につながる情報を収集する！
- 2 授業づくりの段階から、評価に必要な情報を考える！
- 3 子どもの評価と同時に自分の授業も見直す！



とっても大事! 内容項目の関連を考える



横浜国立大学教育学部附属
鎌倉小学校
根本 哲弥

1. 指導書を有効活用するために

「道徳の授業で何をしたらよいかわからない!」
「授業を進めるヒントがほしい!」

このような悩みの手助けとなるものが指導書ですよ。今回は、先生方が指導書をもっともっと有効活用できるように、「道徳教師用指導書 活用術!」をご紹介しますことになりました。

指導書は1教材につき限られたページ数しかありません。しかしそこには、項目ごとに大切なエッセンスが凝縮されています。それらを理解することで、毎時間の授業が、より広がりや深まりのあるものとなり、そのような授業を続けていくことで、先生はもちろん、子どもからも「なるほど!」「いいなあ〜!」「自分もよくありたい!」という声が聞こえてくる授業ができるのではないかと思います。

指導書の内容に沿いながら、
「Hop! 内容項目の関連を考える」
「Step! 展開例から発問、問い返しを考える」
「Jump! 板書例から板書を考える」
に分けて連載していきます。それぞれ関連するもので、つながりを意識して読んでいただくと幸いです。

2. 「関連性のある内容項目」って何?

指導書の「教材の道徳的意味(教材観)」を読むと、「関連する内容項目として」という文言があります。ここで、「関連する内容項目って何?」「1つの教材で1つの内容項目を考えていくんじゃないの?」「主たる内容項目が大事なんですよ?」という疑問が出てくるかもしれません。しかし、主たる内容項目と関連性のある内容項目を理解しておくことはとっても重要! これらを理解しておくことが、「なるほど!」「いいなあ〜!」が生まれる授業に向けた二つの大きな手掛かりとなるのです。

一つ目は、授業のねらいが明確になることです。主たる内容項目と関連性のある内容項目を理解して教材を読むことが、広く深い教材理解につながるのです。学習指

導要領解説には、「具体的な状況で道徳的行為がなされる場合、「第2 内容」に示されている一つの内容項目だけが単独に作用するという事はほとんどない。そこでは、ある内容項目を中心として、幾つかの内容項目が関連し合っている。」と示されています。つまり、教材は具体的な状況を描いているものであり、そこには一つの内容項目だけではなく、さまざまな内容項目が関連し合っているということです。そして、関連する内容項目の中でも中心となっている内容項目があり、それを光文書院では、主たる内容項目として位置づけています。このようなとらえ方をしたうえで教材を読むと、教材に描かれている道徳的な構造を理解することができ、「この授業で何をするか(ねらい)」が見えてきます。

2年生の教材「ぐみの木と小鳥」を例に考えてみましょう。この教材に描かれている小鳥からは、嵐の中でもぐみの実をりすに届けるという「努力と強い意志」や、よいと思うことを進んで行う「善悪の判断」、ぐみの木に対しての「感謝」、交流することで生まれる「友情、信頼」などについても考えることができます。しかし、これらの中心になっているものは、病気で苦しんでいるりすに思いを寄せて行動する「親切、思いやり」です(下記の図を参照)。ですから、主として「親切、思いやり」を手掛かりにして、「困っている人がいたらじっとしてはられない心から生まれた親切のよさ」というねらいを立て、多面的・多角的に教材を読んでいくことになります。



また、内容項目はあくまで道徳的価値を考えるための手掛かりであり、内容項目を教えるのではないということもしっかりと理解しておくことが大切です。だって、間違っただけの方向に向かう努力と強い意志や、思ったことを何でも正直に言うことが価値あるものだとも言えませんよね…。

二つ目は、子どもたちの発言の意図が理解できることです。事前に内容項目の関係を把握しておくことで、

子どもたちの多様な発言の意図をつかみやすくなります。そして、子どもの発言を生かしながら、ねらいに向かって意味づけたり、価値づけたり、板書で視覚化したり、問い返して広がりや深まりを図ったりしながら、子どもと一緒に授業をつくることができるようになります。

では、これまで話してきた内容について、実際の授業を通して考えたいと思います。

3. 子どもの発言を生かした授業例

「ぐみの木と小鳥」で、小鳥が嵐の中、ぐみの実をりすに届けたのはどのような心なのかを考えていきます。

- T: どうして小鳥さんは嵐にもかかわらず、ぐみの実を届けたのだろう?
C: ぐみの木さんのお願いを聞いてあげたかった。
C: ぐみの木さんからぐみの実をもらったから、お礼がしたかったんだよ。

この発言は、ぐみの木への「感謝」から生まれている要素が強いので、病気のりすを思いやり、じっとしてはられない心から生まれた親切な行為について考えを深めるため、次の問い返しを行いました。

- T: お礼をするのが当然ということだね。それなら、嵐が止んでからでもいいのではないかな?
C: りすさんが病気でずっと寝ていて苦しそうだったから、助けたかったんだよ。
C: 今日もりすさんが待っているかもしれないと思うと、早く行きたかった。
C: りすさんは一人ぼっちで寂しそうだったから、友達になりたかったんじゃないかな。
C: ぐみの実を届けるだけでなく、そのときにいろんな話もして楽しかったんだよ。
C: やさしい動物たちばかりだから、みんな仲良しになると思うな。
T: やさしい心を使える動物たちだね。りすさんの風邪が治った後は、どうなるかな?
C: 今度はりすさんが助けてあげるよ!
C: みんなで助け合えるっていいなあ〜!



この発言をきっかけにして、「親切、思いやり」から「友情、信頼」へと思考が広がっていきました。

このように、事前に内容項目の関係を把握しておくことで、子どもの発言の意図が理解でき、子どもの発言を生かしながらねらいに向かって、ぶれずに授業を進めていくことができます。

4. ねらいと評価

内容項目の関連を意識しながら教材を読むことで、教材を広く深くとらえることができ、「この授業で何をするか」というねらいを具体的に立てることができます。

具体的なねらいを立てることができれば、授業を振り返る際にも、ねらいと子どもの姿を重ねて分析し、具体的に評価をすることが可能になるでしょう。

ICTを活用した体育の授業実践例

～4年：マット運動～

ICTを活用した体育の授業実践がどんどん広がっています。一方で、「うまく活用できない」「一度活用したが継続できない」という声も聞こえてきます。今回は墨田区立外手小学校の杉本先生に、ICTを活用して実践した授業についてお話を伺いました。



日本体育大学教授 白旗 和也
光文書院 「体育の学習」 監修

今回お話をいただいた先生 /



墨田区立外手小学校教諭
杉本 智香

白旗：杉本先生は、日々の授業の中でICTを活用されているとのことですので、これから体育の授業でICTを活用しようと思っている先生方にとって参考になるお話が聞けるのではないかと思います。はじめに、今回ご紹介いただく授業実践の概要をご説明ください。

杉本：「みんなでぐるん、ぴたっ、シンクロマット」という単元名をつけて、4年のマット運動の授業を全6時間で行いました。前半の3時間は「知る」段階として、「回転系の基本的な動きを身につける」を目標に、決まりを守ることと子どもたち同士での教え合いを重視して、開脚前転と開脚後転に取り組みました。

後半の3時間は「高める」段階として、前半で身につけた回転系の技を使って、全員で技をそろえるシンクロマットに取り組みました。

今回行った授業 4年マット運動「みんなでぐるん、ぴたっ、シンクロマット」

単元計画：4年・マット運動「みんなでぐるん、ぴたっ、シンクロマット」(全6時間)

※前半は、回転系の技に取り組み。後半は、回転系の技+シンクロマットに取り組み。

時	1	2	3	4	5	6
	知る段階			高める段階		
	回転系の技の行い方を知り、基本的な動きを身につける			身につけた回転系の技でシンクロマットに取り組み		
0	①準備運動 ②感覚づくり 【オリエンテーション】 ③学習の流れ、約束、タブレットの使い方確認	①準備運動 ②感覚づくり ③開脚前転に取り組み ・問題提示【「デジ体」の手本動画】 開脚前転のコツ2：遠くへ着手 開脚前転のコツ3：手の突き放し		①準備運動 ②感覚づくり 【オリエンテーション】 ※4時間目からは、シンクロマットに挑戦		
15	④回転系の技を視覚的に理解し、取り組む技を選ぶ 【「デジ体」の手本動画】 ・開脚前転 ・開脚後転	<場の設定> ①通常 ②坂道(1段) ③段差 ・3人組で練習 ・開脚前転は、前傾も大切		③学習の流れ、約束、タブレットの使い方確認 ④シンクロマットのねらいを確認 ⑤回転系の技に取り組み(第4時のみ) ・3人組×2=6人チームで取り組む ・各チームにタブレットを一台配り、時間を決めて撮影をする【ICT活用】 ・通常の場のほかに、必要に応じて、補助の場を作る ・「技をきれいにしたい」チームは動画を確認する【「デジ体」の手本動画】		
30	⑤決めた技の練習 <場の設定> ①通常 ②坂道 ③段差 開脚前転、開脚後転の コツ1：足を大きく開く	<場の設定> ①通常 ②坂道(1段) ③段差 ・3人組で練習 ・開脚後転は、肘を締める		⑥(第5・6時は⑤)シンクロマット練習 ・身につけた回転系の技でシンクロマットをする シンクロマットのコツ：タイミングを合わせる、動きを合わせる ・タブレットによる撮影は、時間を決めて使用する【ICT活用】 練習の仕方、見合い方、励まし合いなどがよいチームを、中間で取り上げる ⑥ほかのチームに見てもらおう(第5・6時) ・発表会をする(第6時)		
45	⑥学習カードを記入する 【ICT活用】 ⑦全体のまとめ コツを見つければ 上手になる	⑤学習カードを記入する【ICT活用】 ⑥全体のまとめ【「デジ体」の手本動画】 ・コツの確認、よい動きのイメージ化		⑦学習カードを記入する【ICT活用】 ⑧全体のまとめ ・シンクロマットのコツの確認、よい動きのイメージ化 ・教師による価値づけを行う(第6時)		

白旗：中学年の器械運動は、単技を練習し、その完成度を高めていく単元計画が多いと思います。シンクロマットのように技を合わせることを目標にすると、単技だけの授業より、子どもたち同士の関わりが増えますし、協働して「できた!」「作り上げた!」という成就感を得やすいですね。では、ICTを活用された場面について、具体的に詳しく教えてください。

杉本：子どもたちに一人一台端末が配布されているクラスを担当するのは、今年度(2021年度)が初めてでした。そのため、ICTの活用方法は手探りで、ときには子どもたちからアイデアをもらいつつ、活用しました。今回の単元で、ICTを活用した場面を5つに分けてご説明します。

ICTを活用した5つの場面

場面1 手本となる動画の提示

初めて取り組む技について説明するときにデジ体の手本動画を活用しました。子どもたちは今回「開脚前転」と「開脚後転」に初めて取り組んだため、最初は技の名前だけ聞いてもどういう動きなのかがわからなかったと思います。

過去にイラストや連続写真で説明していたときよりも、手本動画は子どもたちの反応がよかったです。「おおっ」という声も上がりましたし、「開脚って、足を開くことなんだね!」という発言も早い段階で出ました。技のイメージが付きやすかったようです。

授業終わりの全体のまとめでも、次回の授業に向けてコツの確認やよいイメージの共有のために、手本動画を確認しました。

デジ体の手本動画は、まず1回手本の動きが流れたあと、2回目は途中でストップしながらポイントが表示される点がよかったですね。



▲タブレットを見せながら技の説明



▲デジ体の動画で技を確認している様子

場面2 子ども同士の撮影

子ども同士の撮影場面で活用しました。

今回の単元では、後半のシンクロマットに取り組む活動のなかで「自分たちは本当にシンクロできているのか」を確認するため、グループ内で交代で撮影して、自分たちで動きを確認できるようにしました。そうすることで、「もう少しここでこうしよう」など自分たちの課題を見つけて対話ができていました。

三脚などは使用せず、手で持って撮影していたこともあり、上手く撮影できない場面もあったようですが、基本的にはタブレットの扱いに慣れている子どもたちなので、撮影時に大人が補助に入ることもなく、お互いの動きを確認できていました。

撮影と、撮影した動画の確認を通じて、「もう一度やりたい!」「撮影し直したい!」という意欲につながっていました。



▲各グループで動画撮影



▲撮影した動画を確認する子どもたち

場面3 学習カードの記入

体育の授業終わりに、学習カードを記入する際には、一人一台のタブレットを活用しました。昨年度までは紙の学習カードを使用しており、体育館や校庭まで、筆箱、学習カード、学習カードを挟むボード、必要があればその他の道具を持ち運んでいました。タブレット一台になって持ち運びしやすくなったと思います。

タブレットで記入する形式にしたことで、自分が撮影した写真を貼ったり、文字の色を変えたり、絵を描いたりといった工夫がしやすくなり、子どもたちも楽しく意欲的に記入できていたと感じています。工夫して書き込むことで、子どもたちも思考を整理できていたように思います。

また、提出がスムーズになりました。これまで、クラス全員分の紙の学習カードを集めるのは大変でした。クラス全体に「誰が出していないの?」と声をかけ、ときには「なくした」「やぶれた」という子に対応し……といった時間が短縮されました。ICTを活用すると、提出した／していないが一目でパッとわかるので、提出していない子にだけ「出してね」と伝えればよくなりました。



▲授業の終わりには学習カードを記入

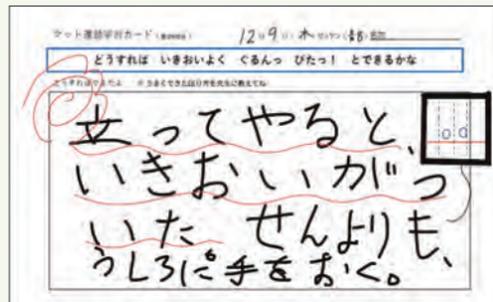


▲工夫しながら学習カードを記入する子どもたち

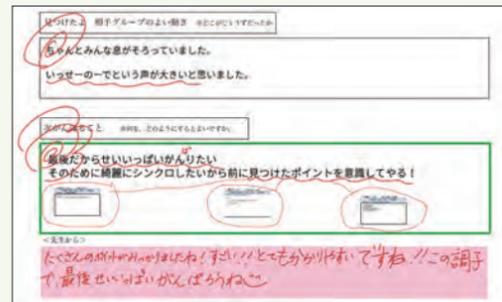
場面4 子どもたちの学習カードへのコメントと返却

場面3とも関連しますが、子どもたちが提出した学習カードのコメント記入と返却の場面でICTの利点を強く感じました。

これまでは紙の学習カードだったので、大量の学習カードを持ち運ばなければならず、確認やコメント記入はもちろん、返却にも時間がかかっていました。ICTを活用することで、タブレット端末が一台あれば空いた時間にどこでもコメント記入ができますし、返却のときも子どもたちに一斉送信できて、とても便利になりました。



▲学習カードの一例（開脚前転）



▲学習カードへのコメントの例

場面5 授業以外の時間での動画の確認

授業以外の時間で、子どもたちから「動画を確認したい」と要望があったときは、動画を確認することを許可しました。たとえば、体育の授業後の休み時間や、給食の時間などに実際に見せました。

いつでも自由に動画を閲覧できるようにすると、休み時間にずっとタブレットで遊んでしまう状況につながりかねないと思ったので、普段は休み時間にタブレットを使わせていません。「見たい!」と言ってきた子に「今だけね」と約束をして見てもらうようにしました。



白旗: 今、現場で行われている体育でのICT活用について、具体的な場面を取り上げて説明していただきました。手本動画の確認や撮影が体育で有効なのは、これまでの『T-Navi Edu』でも繰り返し紹介してきました。やはり、「見てわかる」のはICTの利点ですね。

杉本: 動画を見せるとき、最初は画面上の文字を読まない子もいます。デジ体は、手本動画が流れた後にポイント入り動画が連続して再生されるので、「自由に動画を確認していいよ」と伝えていたら、時間が進むにつれて記載されているポイントを読んで「ここは、こういう動きをするんだ」と、動きを理解していく子が自然と増えていきました。ほかにもデジ体には失敗例、失敗した場合の練習法も収録されているので、子どもたちが「そうか!」と感じやすかったと思います。



◀デジ体では、文字がない通常速度の動画の後、スローモーションや解説入りの動画が流れる。

白旗: 自分たちで撮影して、手本動画と比較できるのもいいですね。課題が見つかりやすい。そして、学習カードの話はともいいながら聞いていました。学習カードをICT化すると、効率がよくなりますね。ほかの子に書いたコメントを流用して一部変更したりもできますし。学習カードの管理は、紙よりICTの方がはるかに便利ですね。

杉本: タブレットがノートの代わりになるように使っていこうという方針が学校や自治体において、全教科で使っています。

白旗: ICTは今後、筆記用具のように当然ある道具の一つになっていくでしょう。全教科で使って操作に慣れることで、各授業で「タブレットの使い方」を確認する時間が減っていきます。一方、使用する時間のルールについては、各学校が模索している段階だと思います。たとえば、宿題として動画を見てもらうことで導入の時間が短縮できます。ただ、下校途中にタブレットを操作している小学生を見かけるようにもなりました。自由度が高くないと活用しづらいし、自由にしすぎると問題も起こるし、難しいところですね。

杉本: 使いこなす子どもは、想定していない使い方もしてしまいますね。子どもたちとは、タブレット使用の際の約束を決めていて、備品なので学校では先生の許可なく使わないようにし、家庭では家の人の許可を得ないと使ってはいけないことにしています。体育の時間でも「タブレットタイム」を決めて、その時間だけ使ってよいことにしています。また、「タブレットタイム」を設けることで、運動と撮影を切り替えて活動できるので、目的をもった意味のあるICTの活用ができたと思います。

今回の実践以外の話や、今後の展望



小型ハードル走の授業で「自分がハードルを越えやすい歩数を考えよう」と伝えたら、子どもたちから「動画を撮ってもいいですか?」という声が上がりました。使用法を細かく伝えていないのに、脚元を中心に撮影したり、スロー再生したりして、「7歩で跳んだ!」、「右足で跳んで!」など、想定した以上にICTを活用して、子どもが発見・成長する姿を見ることができました。一人一台の時代になったばかりですし、ICTには効果的な使用方法がまだまだたくさんあると思います。勉強していきたいです。

今回は「技能」の話が中心でしたが、現在体育では「技能」中心にICTが使われる事例が多いですが、ICTは使い方によっては、「思考力・判断力・表現力」の育成にも有効に使えると思います。一緒に動画を見て意見をかわすことで自然と子どもたち同士の関わりが増え、事実を見て課題をつかんだり、思考が生まれたりします。研究者として新たな使い方の検証をしていきたいですし、実践も増えていくとありがたいですね。今日の話は、全部をいっぺんにでなくても、部分的に取り入れることができると思うので、読者の方にも活用いただけたらと思います。杉本先生、本日はありがとうございました。



コロナ禍における

夏の熱中症・感染症対策

谷口 英喜

済生会横浜市東部病院
患者支援センター長／栄養部部長



コロナ禍で迎えた2020年の夏は全国で6万4869人が、同じく2021年の夏は4万6251人が熱中症で救急搬送されました（6～9月；総務省消防庁集計）。2022年、もし昨年以上に新型コロナウイルス患者対応に追われる医療機関にこの規模の熱中症患者が搬送されるとすれば、医療機関への負担は計り知れません。熱中症はしっかりとした予防をすれば、理論上は発生を限りなくゼロに近づけることができる疾患です。私たち医療従事者は学校での発生予防にも期待しております。しかし、感染症対策を実施しながらの熱中症の予防は困難を極めます。

コロナ禍で迎える3回目の夏を前に、学校での熱中症・感染症対策について、一緒に考えていきましょう。

熱中症の発生メカニズムと重症度分類を理解する

熱中症とは、暑熱（暑い・蒸し暑い）環境によって生じる体調不良の総称です。病態は、暑熱環境により生じた脱水症に、体温コントロールの異常による高体温症が加わったものとされています。

予防しても熱中症が発生してしまった場合には、熱中症の重症度によって異なった対処をとる必要があります（図1）。軽度の熱中症は脱水症の症状が主で体温はそれほど上昇しません。中等度の熱中症になると脱水症に加えて体温が上昇してきます。重度の熱中症では、異常高体温を呈して命に関わる病態となります。従来学校で発生する熱中症は軽度のものが多く、早期に経口補水液（後に解説）を摂取することで容易に改善されます。中等度では身体を冷やし、経口補水液を摂取することで改善が可能です。しかし、意識障害や飲水ができない状態になったら、すぐに病院へ行き輸液療法を受ける必要があります。重度の熱中症は救急搬送を行い集中治療室での管理が必要で、後遺症を残すことや命を落とすことが危惧されます。



▲図1「熱中症の重症度分類と対処法」（日本神経救急学会）を参考に弊社作成

マスク装着は子どもたちの熱中症リスクを高める

2022年の夏も学校では、子どもたちはマスクを装着して授業や学校行事を行うことになるでしょう。マスクを着けていると口腔内や顔に熱がこもり、喉の渇きも感じにくくなります。特に、子どもたちは体温コントロールを呼吸で行う割合が多いので、マスク装着によって大人よりも熱が身体にこもります。

子どもたちは熱中症になると、苦しい、辛い表情をします。しかし、マスクを着けているとそれを察することができませんので、マスク装着は熱中症のリスクを高めると考えられます。

さらに、マスクを装着した夏場の運動は、大変危険と言えます。子どもたちの呼吸は1回の換気量が大人に比べて少ないので、普段から呼吸回数が多いのです。そこに、運動負荷をかけたなら熱がこもると同時に酸素不足が生じて、命に関わるような事態になりかねません。

学校における熱中症予防策

熱中症の予防は暑熱環境を避け、脱水症にならない予防策を講じることが基本です。暑熱環境は、公益財団法人日本スポーツ協会が発表した「熱中症予防運動指針」を遵守することで回避されます（図2）。全ての学校行事、運動、体育の授業などでは暑さ指数（WBGT）を計測し、この予防指針に沿って実施の有無を判断してください（図3）。WBGT計は、教室・体育館・グラウンドなど学校敷地内の至る所で計測できるようにしてください。

脱水症の予防には、十分な食事とこまめな水分補給が効果的です。食事には多くの水分が含まれ、食事が分解されるときにも水分が産生されます。小学生でも1食あたり約250mlの水分が食事により得られますので、

3食とれば食事から約750mlの水分が摂取できることとなります。その他に、飲水により500～1000ml程度の水分をとれば、日頃の脱水予防としては十分な量です。

このためには、授業中も含め、学校内でいつでもどこでも水分摂取を許可することが大切です。先生方の考えるペースで子どもの水分補給を計画することは危険です。子どもの感覚に寄り添って水分補給を実施してください。

ただし、飲料の種類は先生方が決めるのがよいでしょう。過度に糖分が多い飲料は、肝臓に負担がかかったり、血糖値が上がったりして水分摂取には適しません。カフェインに関しては、飲み慣れている子であれば無理に制限する必要はありません。カフェイン含有飲料でも十分な水分補給になります。基本的には水やお茶、カフェインに弱い子どもに限ってはカフェイン抜きの飲料を勧めてください。

▲図2 公益財団法人日本スポーツ協会「熱中症予防運動指針」

▲図3 暑さ指数(WBGT)計

▲図4 経口補水液

いざというときの経口補水液を保健室に常備

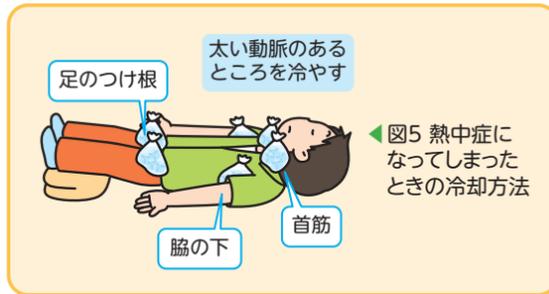
子どもが熱中症になってしまったときは、できるだけ早く経口補水液を摂取させてください。経口補水液とは、水・電解質の補給を迅速に行うことのできる飲料で、病院でも点滴の代わりに使用されている飲料です（図4）。脱水症を素早く改善させてくれます。

脱水症によって脳神経に障害が生じてしまうと、記憶力低下や手足の麻痺が後遺症として残ります。障害を残さないためには、いかに早く脱水症を改善させるかが大切です。子どもたちの将来に後遺症を残さないためにも、保健室に経口補水液を常備しておくことをお勧めします。

正しい冷却方法を施す

中等度以上の熱中症では、身体を冷却が必要です。冷却するには氷枕、氷嚢、冷たい飲料などで身体にあ

る太い血管を冷やします。太い血管とは、首の血管、脇の下の血管、足の付け根の血管です（図5）。この3カ所をしっかりと冷やして、同時にエアコンや扇風機で冷たい風を送りましょう。もし、これらの体温冷却を行ってもなお意識がもうろうとしていて、手に力が入らないような場合には、すぐに救急搬送をしてください。この際、頭から水をかけるような行為は絶対にしてはなりません。頭に水をかけても冷却効果がないばかりか、誤って肺に水が入ったら窒息してしまう危険性があります。



これがポイント！夏の熱中症・感染症対策

2022年の夏、感染症対策を実施しながら熱中症予防をする際のポイントを挙げます。

- 暑熱対策をしながらも、定期的に換気を実施する。
- 1時間おきくらいにマスクを外せる時間を確保して、表情の確認、水分補給を実施する。
- 運動時のマスク装着は避ける。
- WBGTをこまめに計測し、無理な学校生活を送らせる。
- バランスの良い食事と十分な睡眠が熱中症予防の基本だと伝える。
- 手のひらを冷やすことは冷却効果があるので、手洗い時間を15秒以上とるようにする。

先生方へのメッセージ

熱中症予防が毎年のように叫ばれています。しかし、その発生率はゼロにはならず、不幸にも学校での子どもたちの被害が未だ散見されます。被害状況を分析すると、いずれも予防できた事例であり、熱中症発生時に適切な対応を学校でとっていれば後遺症が残らなかったであろう事例もあります。大切な子どもたちの将来を守るのには、学校では先生方しかいません。適切な熱中症の予防策と発症した際の対処法を習得し、子どもたちを守っていただくことの一助として、本記事がお役に立てば幸いです。

事例から考える！ SDGsとの向き合い方

NPO法人eboard

子どもが「学びをあきらめない社会」へ。
「やさしい字幕」付きの学習動画を開発。

「SDGs」とは、「Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)」の略称であり、近年、学校現場でもSDGsをテーマとした教育が増えてきました。

今回は、第5回「ジャパンSDGsアワード」でSDGs推進副本部長（内閣官房長官）賞を受賞した、NPO法人eboardの代表理事・中村孝一さんをお招きし、子どもの教育機会を保障する同団体の取り組みについてお話を伺いました。



NPO法人eboard

2013年設立。「学びをあきらめない社会」の実現をミッションとし、オンラインで取り組める学習動画・ドリルを無料公開している。

ろう・難聴の子、外国につながる子どもなどの教育機会を保障するために字幕付きの動画を制作した「やさしい字幕プロジェクト」は、第5回「ジャパンSDGsアワード」を受賞している。



代表理事
中村 孝一

セーフティネットとして オンラインの学びの場を用意

「学びをあきらめない社会」の実現をミッションに掲げていらっしゃいますが、そのきっかけは何だったのでしょうか。

学生時代に学習塾や学習支援のボランティアをしていた際、勉強が遅れている子や不登校で塾だけで勉強している子に出会ったのがきっかけです。私がそういった子どもたちと過ごした経験がeboardの活動のベースになっています。

学習にハードルがある子どもが、学校の進度に合わせながらも、かつ学び直し等を通じて、基礎的な学力をつけていくという両輪を回していくのはなかなか難しいです。しかし、家庭の経済的な理由や自分や学校の事情で、学びからこぼれ落ちてしまったり、サポートがされなくなったりするようなことがあっても、「子どもたちには学ぶということをあきらめてほしくない」と思っています。学ぶという経験を通して、学習や進路に対する姿勢、自己肯定感などを育み、子どもたちの可能性や人生を切り拓いていっても

raitaitoと感じていたので、そこは私も「あきらめたくない」という思いで取り組み始めました。

「学びをあきらめない」一つの方法として、学習用の動画コンテンツをつくらうと思った経緯についてお伺いしたいです。

もちろん、学校現場でも子どもたちに対して支援がなされているのは理解していますが、やはりどうしても支援にもたどり着けない子どもやそこからこぼれ落ちてしまう子どもがいるので、セーフティネットとして、オンラインでそういう子どもたちが学べる場をつくることにとても価値があるのではないかと考えるようになりました。

大学卒業後、民間企業で働いて1年が経つ頃、MOOCs（ムークス、世界各国の大学の授業をオンライン上で無料で受講できる仕組み）が少しずつ発達していて、海外だとそれを子ども向けに展開するような活動も出てきていました。それを見たときに、「これこそ日本に必要な取り組みだ」と思い、eboardの活動をスタートさせました。



▲eboardの映像授業画面の一例。海外で進んでいた映像授業の取り組みからインスピレーションを得た。

学校の支援が追いついていない環境など、 さまざまな場面で活用が進む

「活動を始めた当初はどのような方々の間で使われることが多かったでしょうか。」

初めて公立小学校に導入いただいたのが2013年で、中山間地帯の人口減少地域の学校でした。地方には塾が少ないので、子どもたちは基本的に学校しか学ぶ場がありません。それは悪いことではないですが、学校の学習から一度こぼれ落ちてしまったときのサポートの場は十分でないという課題がありました。そこで、いわゆる公設塾、放課後学習支援のような場でeboardを使いたいという問い合わせをいただいたのがスタートになっています。2014～2015年あたりはそういった放課後学習での利用、特に地方の放課後学習としての利用が多かったですね。



▲ろう学校や、地方の放課後学習など、さまざまな場面で使用されている。

「活動される中で、手応えややりがいを感じる場面はありますか。」

活動を始めた当時は、YouTubeでさえ使っている人が少なかったのに、動画をアップしても誰も見てくれないような環境でした。しかし活動を始めて間もなくして、地方の学校

のパソコン教室で私が作ったeboardの動画を子どもが見て学んで、それによってできるようになっていく姿を実際に見たときに、「ああ、これは意味のある活動なんだな」と実感できたのを覚えています。

その教室では、動画を使ってみんなが自分のペースで学習を進めていて、授業の復習をする子もいれば、授業のペースに沿って進める子も、進んで予習をする子もいました。今でいう個別最適化ですね。もちろん動画だけではしんどい子もいるので、そういう子にはさらにサポートが必要なのですが、eboardの教材とそういったサポートの組み合わせで、その子に合った学習の仕方を用意できるんだという手応えを感じたのは大きかったです。



▲動画→ドリル、ドリル→動画のどちらの順番でも、個人に合ったやり方で勉強を進められる。

「はじめは放課後学習での活用が多かったとのことですが、現在はいかがでしょうか。」

規模の大きい自治体ですと、予算や補助金を使いながら学習支援に力を入れていく施策も考えられるのですが、地方ではそういった取り組みがなかなか進みづらいので、学校以外の学習の場としてeboardを使ってもらったり、子ども食堂で使ってもらったり、学校でも家庭でもない第三の居場所で使ってもらってケースが増えてきました。

2019年からはコロナ禍による休校やGIGAスクール構想の推進がきっかけとなって、オンライン授業として使ってもらったり、授業内でもいわゆる個別最適化・自由進度学習で使ってもらったり、映像付きのドリル教材として、授業後の復習に使ってもらったり、といったように使用場面は徐々に多様化しているように感じます。

ユニバーサルデザインとしての 「やさしい字幕プロジェクト」

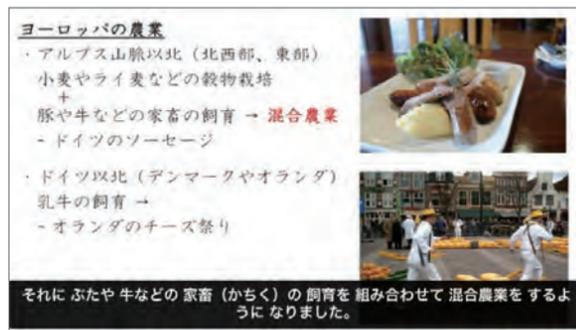
「SDGsアワードを受賞された「やさしい字幕プロジェクト」は、コロナ禍をきっかけに取り組み始めた企画とのことですね。単なる字幕ではなく、「やさしい字幕」にされた意図を教えてください。」

字幕については、もともとろう学校から要望をいただくことは多かったのですが、コロナ禍で学校が一斉休校になっていた2020年3～5月に、ろう学校だけでなく、家庭や聴覚障がいをもっている子ども本人からも、多くの要望をいただいたことがきっかけになっています。休校期間は無償で公開されている映像コンテンツが多くありましたが、「世の中には映像の学習コンテンツがたくさんあるのに、ほとんど字幕が付いていなくて困っています」との声が聞こえてきたり、Twitterでもそういった投稿を見かけたりするようになりました。



聴覚障がいの方は、どうしても脳にインプットされる言葉の量が幼いときから少ないので、日本語の発達が遅れてしまうことが多いです。ろう学校高等部の子の日本語の読解力は、健聴児の小学5年生と同程度になってしまうことも指摘されており(長南・澤(2007) 読書力診断検査に見られる聾学校生徒の読書力の発達『ろう教育科学』49、101-112)、ただ音声で文字起こしするのではなく、簡単で理解しやすい日本語に変換した字幕を付ける必要がありました。

「日本語の言葉をよりわかりやすくするためのスタンダード(基準)として何があるだろうか」と考えていたときに、当時のプロジェクトメンバーから出てきたアイデアが『「やさしい日本語」(日本語があまり得意でない人にも伝わるよう、一般的な日本語よりもわかりやすい表現に言い換えた日本語のこと)を使う』というものでした。「やさしい日本語」を使用することで、聴覚障がいを抱える子どもだけではなく、他の障がいがある子や日本語に慣れていない外国につながる



▲「やさしい字幕」が付いた動画

る子なども広く使えるような字幕にしようということではまったのが「やさしい字幕プロジェクト」です。

——字幕なしの動画で伝わる子どももいますが、「やさしい字幕」が付いたからといってその子どもたちが理解できなくなることはないですね。なるべく多くの人々に伝わる形にするという点では、「ユニバーサルデザイン」の考え方に近いものを感じます。

まさにそうですね。私は字幕がなくてもeboardの動画の内容を理解できますが、字幕があるとより情報が入りやすいので、常に字幕ありで動画を見ています。障がいのあるなしにかかわらず、私のように聴覚より視覚情報の方が認識しやすい人もいます。そういう点でおっしゃる通り「ユニバーサルデザイン」なのだと思います。

私たちの間では、字幕を付ける作業を「階段に手すりを付けるようなこと」とイメージしていて、手すりがなくても全く問題ない人はいるけれども、手すりがあると初めて上れるようになる人もいます。なくてもよかったけれど、突然怪我をして手すりが必要になる人もいます。「特定の誰かをイメージして」というのではなく「そこにあることで、ある人は劇的によくなるし、またある人にとってはたまにちょっと助かる」、そういったニュアンスを「やさしい字幕」の「やさしい」に込めています。



▲手すりがあることで、階段を上れるようになる人もいます。

特別支援学級の場合には、eboardの動画を使って「思ったよりこの子って視覚で情報を集めているんだな」とか、「字幕があった方が学習内容にすごく集中できるんだな」とか、先生方が子どもたちの特性を改めて発見することもあるようです。

雑音が多い環境での学習に集中できないような過敏の子どもに対しては、あえて音声を消して映像と字幕だけで学習してもらうケースもあると聞いています。これは私たちが想定していなかった使い方、eboardの可能性がどんどん広がっているようでうれしいです。

——現在の学校は、集団での一斉授業が基本になっており、子どもが授業から少しでも遅れてしまうことは自己肯定感の低下を招いてしまうこともあるそうです。そんな子どもたちにとっては、「動画を見る」というシンプルな行為でも、「最後まで動画を見れた！」と思えることが、自己肯定感の向上につながっていくような気がします。

まさに私たちが掲げている「学びをあきらめない」というのは、「自分で学んでいく力をつけること」とつながると考えています。子どもたちにとって、「自分はどういうツールや手段があれば学べるんだ」という手応えを感じながら、自分に合った学び方をつかんでいくことはとても重要だと思っています。社会に出てからも人は学び続けていく必要があるという点を踏まえても、学校を卒業する際に「自分は〇〇を学んだ」という結果より、「自分はこうすれば学んでいけるんだ」という手段を知っている方が将来大事だと思います。



デジタル教材に対するとらえ方を問い直し、個別最適な学習へつなげる

——SDGsアワードを受賞されたことについては、どうとらえられていますか？

eboardとして字幕を広めたいという思いがあったのはもちろんですが、手伝ってくださった多くの方により報告が



▲SDGsアワード受賞の様子

できるのがうれしい、という気持ちがいちばん大きかったです。また、審査員の方々にも、私たちが課題としてとらえていたものを同じく課題としてとらえていただいた、そこにおけるアプローチを評価していただいた、私たちの活動が意義があると認めていただいた、というとらえ方もできるかなと思っています。

——eboardさんの活動について、今後新しく計画されていることなどはありますか？

近年、学習支援を受けられていない不登校の子どもが増えているという実情があるので、今後は、教材以外の部分でそういった子どもたちをサポートできるようなアクションを取っていきたいと思っています。

もう一つは、ICT教材に取り組んできた強みを活かして、外国で日本語を勉強するための教材づくりにも力を入れていきたいと考えているところです。

——最後に、全国の先生方へメッセージをお願いします。

先生方は現在、ICT端末の導入によって対応に追われてしまうことが多いと思いますが、オンラインの学習コンテンツを「授業の中で使うツール、学力を上げるツール」とだけとらえるのではなく、「その子に合った学習を用意してあげられるツール」としてとらえることで、普段の学習がうまく進まない子どもに対する支援の糸口が見つかるのではないかと考えています。たとえば、今までは頑張って書いて学習していたけれど、タイピングでもよいと言われるだけで救われる子も、実はたくさんいるはず。そういう視点でデジタルをとらえていただき、その中でもeboardの動画がマッチする子どもがいれば、ぜひ活用いただけたらと思います。

eboardは多くの方からの寄付によって無償で動画を提供でき、民間企業ではなかなか難しいような取り組みにもチャレンジできています。もしeboardを使って、「これはこれからの世の中にもぜひ残していきたい！」と共感してくださる先生がいらっしゃれば、ぜひ寄付という形で応援していただけると幸いです。

eboardの活動詳細は、ぜひ公式サイトでチェックしてみてください！



光文書院からの
お知らせ

夏休み前までの復習はかんぺき！

光文書院の夏休み教材

読書感想文おうえんシート※をリニューアル！

読書感想文にもっと取り組みやすくなるよう、「読書感想文の書き方」をリニューアルしました。反対の面には、人気の「本選びチャート」が載っております。※2～6年「かんぺき！夏休み」「いきいき！なつドリル」のみの付録となります。

これまで → おうえんシートを使うと… → ステップ式で取り組みやすい！

読書感想文って何から書き始めればいいだろう…

「読書感想文の書き方」のステップに沿って書いてみればいいんだ！私にもできそう！

宿題に出しても安心！

夏休み中も子どもたちが自分の力で取り組むことができそう！

充実の教材ラインナップ！

基礎・基本から活用まで！
「かんぺき！夏休み」



定価 400円(税込)

基礎・基本の復習に！
「いきいき！なつドリル」



定価 290円(税込)

国語・算数をしっかり復習！
「げんき！なつドリル」



定価 200円(税込)

夏休みこそGIGA端末！3大デジタル付録

- NEW!** デジタル 子どもと夏だより Google フォーム・Microsoft Formsに対応
 児童とつながるコンテンツが新登場！先生はテンプレートを選んで送るだけ！
 かんたん！デジタル 暑中見舞い
 写真で送ろう！わたしの発見
 先生に暑中見舞いを出してみよう！
 夏休み中も元気に過ごせているみたい！休み明けに声をかけてみようかな！
※コンテンツは開発中のため、変更になる可能性があります。※Google系サービスの名称やロゴは、Google LLC の商標です。※本資料は、Googleによって承認または提携されたものではありません。※Microsoft系サービスの名称やロゴは、Microsoft corporationの商標です。※本資料は、Microsoftによって承認または提携されたものではありません。
- 自由研究わくわく動画**
 30本以上の動画コンテンツで自由研究をサポート！
 教材の目次から簡単アクセス！
- デジタル教材**
 漢字・計算・読書感想文までばっちり！
 デジ漢 デジ計 デジ算
※デジ漢・デジ計は標準版となります。また、デジ漢は「れんしゅう」のみのご利用となります。「テスト（書きのかくにん、読みのかくにん）」はご利用いただけません。

もっと知りたい！
夏休み教材の詳細はこちら

T-Navi Edu Vol.12 編集後記

T-Navi Edu Vol.12をお読みいただきありがとうございます。
 早いもので6月…。およそ1か月後には夏休みですね。
 今回の巻頭特集「性教育をとらえなおす」はいかがだったでしょうか。私は渡辺大輔先生への取材を通して、「性教育」は単なる保健体育の一教科としてではなく、さまざまな教科の中で体系的に学ぶ（学べる）内容であるという重要な視点に改めて気づかされました。きっとその視点によって、自分ごととしてとらえるきっかけが増えていくのではないかなと思います。私自身も、今年の夏を前に、考えるきっかけをいただきました。
 さて、T-Navi 編集部では、Vol.12のご感想や特集テーマのリクエストを大募集しています。右下の二次元コードからお気軽にお寄せいただけると嬉しいです。また、Twitterでも募集中です。ハッシュタグ「#なるほどていーなび」を付けてぜひ感想をお寄せください！今後とも、どうぞよろしくお願いたします！ 岡田

取材・原稿作成にご協力いただいたみなさまに心より感謝申し上げます。
 次号 T-Navi Edu Vol.13は2022年11月発行予定！ お楽しみに！

ご意見・ご感想はこちらから！



注目の新商品

光文書院のデジタルドリル



子どもの自己学習能力が身につく
「ドリルプラネット」

実証研究申込受付中!

「ドリルプラネット」は、①自己学習能力が身につく機能と、シンプルで分かりやすい導線 ②ピクサーのキャラクターによる、児童の学びを楽しくするサポート ③先生が手軽に選べるお求めやすい納得の価格設定 を特長とするデジタルドリルです。

2022年度は実証研究として、ドリルプラネットを申込先着児童22万名まで無料でご提供いたします。



© Disney/Pixar

特設ページは
こちら



- ★『トイ・ストーリー』の仲間たちと一緒に学習!
- ★簡単に漢字・計算の宿題を配信
- ★提出状況、個人別正答率は自動集計

サービス概要

対象学年	小学校1～6年
提供方法	クラウドサービス
対象教科・準拠	国語(漢字): 光村、東書、教出 算数: 東書、啓林、標準版

お申込
受付中

2022年9月 実証研究スタート! (2022年度末まで)

※実証研究の成果物の提供(使用結果に関するアンケート等への回答)にご協力いただく必要があります。
※当ページに記載の仕様や画面は開発中のものであり、予告なく変更する場合があります。

お申込を検討される方は、担当の販売店までご連絡ください。

先生方へ

光文書院より
目より情報!

光文Webサイト 情報コンテンツのご紹介

Webサイトにて、先生方向けの情報コンテンツを
ご紹介しております!

最新の商品情報やWebコラムの更新情報を
メールマガジンやTwitterなどさまざまな媒体で
お届け中! 情報収集にぜひご活用ください。

詳細はこちら



情報コンテンツの
ご紹介

気軽な情報収集にご活用いただけます!

